

E-5 生け花保存剤としての食酢の効果について
ミツカン酢研 正井博之 ○上館 昭

目的 従来の生け花、切り花の保存剤としての多くは、いずれも農薬あるいは強力な毒性を有する化学物質を使用したものである。これらのものは使用法によっては人体に対する毒性が大きいと共に使用後の用水の排水汚染の一因となることも大きい問題である。著者らはこれらの点を十分に考慮し、生け花保存剤の検索に当り食酢（醸造酢）単独使用または卵白リゾチーム等2～3の物質との併用により生け花保存に大きい効力をもつことを発見した。著者らは生け花用水のPH、濁度、酸度等の経時的変化について測定した。

方法 水道水を食酢（醸造酢）で酸度0.00012～0.092に調整したものを生け花の用水として使用した。この用水を200～500ml容メスシリンドーに採取し被検体として比較的保存性の悪い切り花（カーネーション、バラ、ガーベラ、ダリア等）を3～4本ずつ挿し実験に供した。尚対照として水道水のみを用いたものを使用した。PH測定にはガラス電極法、濁度測定には660m μ の吸光度で示した。酸度測定は常法に従って行ない%N-NaOHの滴定数でもって表わした。保存日数の表示は観照用として可と思われる日数でもって表わした。

結果 本法の使用により水道水のみ用いたものに比べ保存日数が1.25～2.25倍延長が可能であった。更に用水のPH、酸度は経時的に著しい変動を示すことを発見した。